The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古フランス語の語順について : thème・rhèmeの観点からの一考察
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1978, 12, p. 37-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47796
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古フランス語の語順について

——thème-rhème の観点からの一考察

春 木 仁 孝

0. 序 論

この小論の目的は，古フランス語 ancien français の語順を thème-rhème の観点から検討することにある。[1] そして、現代フランス語に比べ語順の固定度がかなり低かった古フランス語の語順決定において、この意味論的、あるいは機能的な原則がかなり大きな役割を果たしていたことを示すことにある。対象とするテクストは、13世紀に書かれた「アーサー王の死」と呼ばれる散文作品である。[2]

個別言語の語順についての研究は今までにもいろいろと行なわれてきているが，統辞論の他の問題と比較した場合、その重要さにもかかわらず、語順研究に取り組んだ研究者の数は余りにも少なかった。また、今までになされた研究もその大半が記述的なものである。最近、漸く類型学的研究も行なわれているものの、これら記述的・類型学的研究によって得られた成果を踏まえて、さらに大きな射程を持つ一般言語学的な研究を行なうことが、今後の課題として残されている。

古フランス語についても、その記述的研究を通して、古フランス語が持つ形式的制約や、各語順タイプの頻度などについてはかなりの事実が解明されている。[3] たとえば、一般的に動詞が文要素として２番目の位置に置かれなければならないという形式的制約が、 古フランス語の語順決定の上で大きな役割を果たしている。この制約の存在により、古フランス語で

は、S-V-C(omplément) とC-V-S という語順が最も多くみられることになる。[4]

さて、語順を一般的な視野から研究するためには、各個別言語の語順について単なる記述的研究を行なうだけではなく、その語順決定に関与している原則を追求しなければならない。特に、古フランス語やスペイン語、日本語の様に、現代英語や現代フランス語などと比較して語順の変異の幅が大きな言語における語順決定の要因を詳しく検討することが重要である。そして、最終的には自然言語の多くに共通する様な、普遍的原則を解明することが目標とされねばならない。これは何も、すべての言語の語順が単一の原則に従っているという意味ではなく、自然言語の多くに程度の差こそあれ有効である様な原則が（一つあるいはそれ以上）存在しており、各言語においては、そ（れら）の原則と各言語固有の原則や形式的制約が絡みあって、実際の語順が決定されていることは言うまでもない。

この小論においても、古フランス語の実例の具体的な検討を通して、古フランス語に固有の制約にも考慮を払いつつ、限られた範囲内ではあるが、一般的な原則の現われ方を追求してみたい。

1．分析の枠組：*thème-rhème*

さて冒頭にも述べた様に、ここでは、thème-rhème の原則を分析の枠組として採用する。術語の差はあれ、この種の原則が自然言語において重要な役割を果たしているという認識は、プラーグ学派の創設者の一人である Mathesius 以来かなり広まってはいる。特に語順との関係で thème や rhème が話題にのぼることは、ここ10年来、急にその機会が増えてきた。しかしここで問題なのは、しばしば明確な定義がなされないまま thème-rhème という言葉が使用されていることと、定義が一応なされている場

合にも、その概念規定が言語学者の間でもかなり相違していることが多いことである。

thème の伝統的な定義は、「それについて話者が何事かを述べようとしているところのもの」である。そして、その「何事かを述べている部分」が rhème である。これは、いわゆる題述関係にあたる。また Mathesius の定義[5]は、「所与の状況において知られているかあるいは少なくとも明らかであり、それから出発して話者が談話を進めてゆくところのもの」が thème で、rhème は「話者が発話の thème について、あるいはそれに関して述べるところのもの」となっており、これは、旧情報—新情報、あるいは既知—未知の区別にほぼ等しいものと考えられる。どちらの定義の場合も、文においては thème から rhème へと配置される傾向が強いことが知られている。しかし語順を研究する場合、伝統的な定義も Mathesius 的な定義も、共に不充分であると考えられる。その点を詳しく検討する余裕はないが、たとえば「それについて話者が何かを述べようとする事柄」は、必ずしも「既知」あるいは「状況から明らか」であるとは限らない。

1) ..., ; et *li rois de Norgales* qui demoroit a un suen recet pres a uit liues de Athean, si tost comme il sot que li parent au roi Ban i estoient, cil qui estoient li plus renommé del monde et de greigneur proesce et de greigneur chevalerie, il les ala veoir, car moult desirroit a avoir leur acointance ; (37/18)

1）の lirois de Norgales については、これ以前には全く言及がなく[6]未知のものであるが、長い関係節の挿入の後に代名詞で再び受けられていることからも分かる様に、これはこの文の主題である。言い換えるならば、王が何をしたかについての部分が重要なのである。

つまり1）の文の語順は、題述関係としての thème-rhème の構造からは説明できても、既知—未知としてのthème-rhème の構造からはこのま

までは説明できないのである。それでは題述関係と既知ー未知の関係という二つのレベルを考えるべきだろうか。しかし、一般に主題が既知であることが多く、述部が未知であるのが普通であるというのも事実である。この事実からも、語順研究の枠組としては、この二つを別々のレベルで考えるよりも、何らかのやり方で総合的に同一の枠組の中で研究する方が望ましく思われる。

この小論では、むしろ「contexte の中に文を位置づける働き」を最も重視したい。物語の冒頭の文などを除き、文というのは、まずその文を contexte の中に位置づける要素を持っており、その位置づけの上に新しい情報が付け加えられてゆき、そしてその新しい情報はそれ以前の情報と共に次の文に対する contexte を形成してゆくと考えられる。そして人間の認識という観点から、contexte →(contexte への位置づけ→新情報)$_{文}$という配列が最も自然で経済的なものと考えられる。ここでは、この contexte への位置づけの役割を果たす要素を thème, それ以外の新情報の部分を rhème と呼ぶことにする。[7] この様な定義をしたうえで、どの様な文要素が thème としての役割を果たすかを検討してゆきたい。また、この様な定義のもとでは、題述関係と既知ー未知の関係がどの様に扱われるかも興味のある問題である。

今回は、主として主語以外の文要素が thème となっている有標の語順を対象として取り上げる。

2.1. 既知と主題

一つの文を contexte に位置づけるということは、その文とそれ以前の言述との間に何らかのつながりをつけるということである。そのための代表的手段は、既にそれまでの文脈に現われた要素への言及を行なうことであり、それはしばしば前方照応的 anaphorique な要素を含むことを意味

する。これが、既知とか旧情報と呼ばれるものである[8]が、これらの要素は、新情報が述べられる対象となることが多いため、結局は主題となることが非常に多い。しかし、確かにこの二つは重なることが多いが、既知であれば常に主題、主題であれば必ず既知という訳ではない。既知でない主題もあるし、既知の要素が二つ以上あれば、主題となりうるのは普通その中の一つだけである。

まず既知であり、かつ主題であると考えられる thème の例から見てゆこう。

2) —Damoisele, fet messire Gauvains, comment a il *non,* votre amis?—Sire, fet la damoisele, *son non* ne vos dirai ge mie; mes ge vos mostrerai *son escu,* qui il lessa ceanz quant il ala a l'assemblee de Wincestre. —*L'escu,* fet il, vueill ge bien veoir; (26/62)

2）の例では、thème → rhème という構造が非常に明瞭に見てとれる。最初の文で問題となっているもの(rhème)は、non という名詞句であり、実質的には文末に置かれている。その次の文では、前の文の rhème であった non が既知の主題として son non という形で文頭に置かれている。この文の後半部 mes 以下は無標の語順であるが、無標の語順というのは、簡単に言うと thème →rhème の配列とS－V－Cという語順がほぼ重なった文と言うことができる。この文では、son escu が新情報で、rhème として文末に置かれている。実際には関係節が続いている訳だが、これはフランス語の持つ形式的制約によるものである。特にこの文は、前半と後半がほぼ同じ文法的構造を持ちながら、その配列が、thème-rhème 構造の違いにより対称的になっている点が注目に値する。その次の文では、前の文の rhème を受けて l'escu が thème として文頭に置かれている。

さらに直接目的語の例をあげよう。

3) Et *tout ice* me fist a croire Agravains vostre freres; (30/64)

4) *Ceste parole* dist li rois Artus del roi Baudemagu, dont messires Gauvains fu assez plus a malese qu'il n'estoit devant. (3/36)

5) Et cil li dist que *cest message* fera il bien; (41/77)

3), 4), 5) の例にはすべて前方照応的な代名形容詞が用いられて、既知のものであることがはっきりと示されている。これらの例に限らず、動詞の前に直接目的語がくる場合には、代名形容詞、所有形容詞や定冠詞が用いられているのが普通である。また、目的語としての中性代名詞 ce が文頭に置かれている例も多い。

6) Sachiez que c'est li mieudres chevaliers del monde, *ce* vos creant ge loiaument. (13/14)

7) Tu ne vendras pas avec moi, car se tu i venoies, on te connoistroit, et par toi connoistroit l'en moi, et *ce* ne vodroie ge en nule maniere. (16/58)

8) —De ce que nos nes trovons, fet messire Gauvains, me poise il moult durement; *ce* vos di ge bien por verité. (23/23)

この ce というのは、まさに前の contexte の中で述べられたこと全体をさしている訳だから、それだけ contexte とのつながりが強く、従って thème となりやすいのである。

次に直接目的語以外の例をみてみよう。

9) *A cele chose* s'acorde Hestors et Lioniax, et puis viennent au roi et demandent congié d'aler querre Lancelot; (36/86)

10) ; mes *a monseigneur Gauvain* avint par aventure qu'il descendi en la meson ou Lancelos avoit la nuit geü ; (25/18)

11) ; et il corut meintenant a Boort (...) et a Hestor, et a Lionel, et a monseigneur Gauvain ; *a celui* fet il joie merveilleuse, (...). (45/27)

9）の例では、この文の前に一つの提案が行なわれ、それ(cele chose = thème）に対して、誰がかというと「Hestors とLioniax」が、どうしたかというと「同意した」という新しい情報（rhème）がつけ加えられているのである。

以下は状況補語の例である。

12) ; *pres de ci, hors del grant chemin, a senestre,* est li ostex a une moie antein (...). (15/14)

13) —Dont nos en ralons, fet li chevaliers, chiés m'antain, la ou nos geüsmes anuit, car *illec* serons nos bien a repos, et si n'a mie granment jusques la. (21/17)

14) (...) et quant il s'en parti, il erra jusqu'a *un bois* ; et *en cel bois* avoit jadis esté Lancelos en prison deus yvers et un esté chiés Morgain la desloial (...). (48/8)

15) *En cele pensee* demora tant qu'ele s'endormi. (50/38)

14）では、前の文の末尾に rhème として置かれていた不定冠詞つきの bois が、次の文では thème として cel のついた形で文頭に置かれ、contexte への位置づけという役割がはっきりとあらわれている。

これまでの例は既知で主題の thème であったが、主題ということがもっと明瞭にあらわれているのは、次の様な例においてであろう。

16) —*De ce que nos nes trovons,* fet messire Gauvains, me poise il moult durement; (23/23)

17) Mes *de Boort et de sa compaignie* qui si ont la cort lessiee por defaute de Lancelot a ele si grant pitié (...). (44/15)

18) Damoisele, *del tornoiement* vos puis ge bien dire qu'il a esté li mieuz feruz que ge veïsse mes pieca. (25/30)

19) —En non Dieu, fet Boorz, *de celui* ne voudroie ge en nule maniere que ce fust messires mes cousins, (...). (34/14)

20) —Biaus frere, fet ele, *de ce* ne me requerez mie; (50/73)

21) ... ; car *si preudom et si bons chevaliers comme vos estes* ne voudroie ge en nule meniere qu'il moreust en ma garde. (41/46)

これらの例では、「〜については」という前置詞句が実質的に文頭にあって、それぞれの文の主題であることがはっきりと分かる。17）の例ではde以下の主題がかなり長いにもかかわらず、thème として文頭に置かれている点に注意すべきであろう。20）の様にde ce という形の thèmeの例は、さらに数例あった。次に21）は、16)〜20)の例から考えてde si preudom となっていることが予測されるが、実際にはdeはない。文法的にはvouloirの目的語の様にも見えるが、やはりこれは主題を示す名詞句であろう。

ここで、1）の例文を思い出して頂きたい。li rois de Norgales はここで初めて言及されることから新情報であることは明らかである。主題は、「現在その談話において話題になっているもの」という性格を持っている以上、既知の要素は主題になる確率が高く、未知の要素が主題になることが極めて少ないのは当然と考えられる。しかし1）においては、すぐにqui以下の関係節によってli rois de Norgales がcontexte の中に組み込

まれ、si tost comme 以下によってその行動の背景が記述され、こうして未知であった要素が充分に既知化された上で、主題としての役割を果たしていると考えられる。以下は同様の例である。[9]

22) *Li rois Artus,* qui encore estoit apoiez a une fenestre, vit le cheval Lancelot; (11/1)

23) Et *Hestors,* qui cuide que li rois ait dite ceste parole par mal de Boort, saut avant toz corrouciez et pleins de mautalent, et dist au roi: (24/34)

未知のものが主題になっているのは、この様に関係節のついた名詞句とは限らない。たとえば24）の例文の contexte となる35節は、アーサー王とゴーヴァンが宮殿のある窓の所でランスロのことを話題にしている場面である。

24) *La reïne* estoit apuiee toute pensive à unes autres fenestres et oï quanque li rois et messire Gauvains distrent; si vint avant et dist: (36/1)

24）のLa reïneは、当然、新情報であるが、文の主題となっている。これはどのように考えたらよいのだろうか。35節では、王とゴーヴァンの観点から話が記述されていたのが、突然 La reïne によって文が始まることにより、視点の転換が行なわれ、一つの効果が生まれている。すなわち、女王がその場の見えない所にずっといて二人の話を聞いていたという状況が、生き生きと読者に伝わってくる。この効果は、視点の一貫性の観点から説明される。[10] 英語やフランス語などいくつかの言語においては、一度決めた視点はできるだけ守ろうとする傾向が、日本語などに比べてずっと強いと言われる。既知のものが主題になりやすいということも、この視点の一貫性の一つの現われとも考えられる。24）においても、王とゴーヴァンの視点から話が進んできていたところへ、自然な方法で視点を変更する

導入的な文なしで、女王という未知の主題によって24）の文が始まることで、唐突に視点の変化が行なわれる。そして視点の一貫性という制約のために、いわばそれ以前の部分も24）の文と同一の視点で見られていた様な再解釈を読者に強いるところから、前述した様な効果が生じると考えられる。これは、視点の一貫性という制約を逆手に取った文体技法と言える。

2．2．　限定的状況補語

この節で検討するのは、限定的な状況補語からなる thème である。

古フランス語の文には、時の副詞あるいは時を表わす状況補語によって始まっているものが多い。これもまた、我々の定義によれば thème なのである。つまり、時を示す副詞や補語は、時間の流れに沿って展開する物語の中で、特定の事件や登場人物の行為、行動に対して枠組を与える役割をしているのであり、これはまさに文を contexte の中に位置づけるということに他ならない。

25) Et *l'endemain* vint a coort Boorz, et Lyoniax et Hestors et leur compaignie qui venoient de l'assemblee; (33/1)

25）では、翌日 l'endemain という語が、その後に記述される内容の時間的枠組として示されているのであり、その翌日に「何かが起こり」あるいは「誰かがやってくる」のである。その「何か」、その「誰か」、さらにその「誰かの行為」によって物語が発展、展開してゆくのであるから、当然その部分が新情報を伝える rhème を構成することになる。さらに例を挙げる。

26) *Icelui jor meïsmes* proierent li sui frere d'Escalot a Lancelot que il fussent de sa compaignie (...). (56/8)

27) *Trois jorz devant l'assemblee* apela Lancelos son escuier, et si li dist: (64/7)

28) *Meintenant* se part Lancelos de leanz entre lui et son compaignon (...). (16/63)

次の２例は期間を表わしている。

29) *Toute cele semeinne et l'autre après* demora Boorz en l'ostel le roi Artu entre lui et sa compaignie, (...). (34/46)

30) *La nuit* regarderent li escuier as armes leur seigneurs que il n'i fausist riens. (16/24)

未来の時間に関する限定が行なわれる場合もある。

31) (...) et *sempres de quele eure que il vos plera,* nos en irons tuit ensemble. (12/46)

また、直接時間への言及はないが、32）の様な例も時間的限定を表わす thème と考えられる。

32) ; et *au parcheoir* brise li glaives. (19/32)

騎士が「馬から落ちた時」に、槍が折れたのである。

限定的な状況補語というのは、物語の流れの中に文を位置づけるという性格上、主として時間的なものであるが、稀に場所的なものを見られる。次の例は、否定による最上級というやや特殊な例ではあるが、時間と場所についての限定が行なわれている。

33) (...) car *onques puis en leu ou ge fusse* ne vi autant fere d'armes a un chevalier comme il fist celui jor. (53/33)

「（カメロットの騎馬試合）以来 onques puis，どこにおいても en leu ou ge fusse」の部分が、以下の内容の枠として thème を構成しており、その限定の中に rhème の部分が述べられている。

古フランス語のテクストを読んでいて気づくのは、lors や atant といった時間に関する副詞が頻繁に使われていることである。実例を見てみよう。

34) *Lors* saut avant Girflez et dist a la reïne: (32/1)

35) *Lors* monta Lancelos seur son cheval et dist a son escuier: (16/57)

36) *Lors* se parti la damoisele de devant lui et s'en vint a son lit (...). (57/38)

37) Et *lors* commencierent damoiseles a aporter mes, (...). (49/5)

38) *Atant* se part Boorz de la reïne et vient a Lancelot; (59/92)

39) *Atant s*'en ist li rois de la chambre et s'en revet el grant palés (...). (62/75)

lors も atant も訳すならば、「その時」「それから」などの意味になるだろう。上の6例の動詞をみると、ある共通性が存在することが分かる。それは、どの動詞も点的な行為を表わしており、それも多くは移動（の開始）を表わす動詞であり、これらの文によって、たとえ小規模なものであれ場面の新たな展開が行なわれていることは明らかである。その意味でこれらの副詞もその文と contexte との関係を表わしており、thème となっている。

以下の例は、少し異なった感じの例である。

40) *Lors* dist li rois que cele chose n'estoit pas d'ome, mes de deable. (53/48)

41) Et *lors* pensa meintenent la reïne que ce ne fu mie Lancelos, (...). (31/16)

42) —Je vos di, fet ele, que *lors* le tin ge en prison deus yvers et un esté; (53/39)

まずdire やmander と共に用いられている例や、41）の様な例は、それ以前の contexte に対する主語の反応を導入する役割を果たしていると考えられる。また42）の例では、tenir という状態を表わす動詞と共に用いられており、「その頃」という期間を表わす使い方で、この節の最初に述べた様な例と同様、文を時間的に限定する役割を果たしている。

2.3.　意味論的関係と *theme-rhème* 構造

2.1. と 2.2. で観察した thème-rhème 構造は、常に contexte との関連で決定されるべきものであった。我々の定義からは、すべてのthème-rhème 構造はそうあるべきなのは言うまでもないが、contexte からある程度独立的にも、その意味論的関係から thème-rhème 構造が決まってくるものがある。

たとえば、同一文中に理由・原因を表わす部分とその結果を表わす部分がある時、無標の順序は、理由・原因→結果であることは肯けよう。こういう前提から文頭に現われる要素に注意してみると、実際、次の様な例が多く見つかる。

43) ; et *por ce* commença il ceste derrienne partie. (1/8)

44) ; *por ce* si m'en terai outreement a ceste foiz. (24/19)

45) Et *por ce* servi tant la damoisele que messire Gauvains et si compaignon orent mengié. (25/55)

これらの例はすべて por ce「それ故」という前置詞句で始まっている。このpor ce が文頭以外に置かれている例は、今回の調査範囲の中では1

例も見られなかった。

por ce 以外の例を見てみよう。

46) ; et *por l'amor de lui li* pesoit il moult que tuit si compaignon ne demoroient a court. (44/27)

47) Et *por la grant biautẽ que ge vi en lui,* la requis ge d'amors n'a pas granment; (35/29)

48) *De ceste parole* furent moult esmaié li troi cousin qui bien orent oï tot ce que li escuiers ot dit; (42/1)

49) ; *de cele plaie qu'il ot receüe par la main Boort son cousin jut il leanz* sis semeinnes (...). (22/3)

これらの例では por もしくは de によって理由・原因が示され、その次にそれに由来する事柄、出来事が記述されており、人間の思考という見地から考えてより自然な流れが、現代フランス語の様な制約をほとんど受けることなく、そのまま実現されている。上の例にはすべて前方照応的な要素が含まれていることからも予想されるように、ある文中で理由・原因を表わす要素は、やはりそれ以前の contexte に依存するのが普通であり、これらの要素も文を contexte の情報との関連で位置づけるという役割を果たしていることには変わりがない。

これ以外に意味論的に決定される thème-rhème 構造には、条件→帰結という関係がある。

50) ... ; car *en plus demorer* ne poons nos rien gaengnier. (21/9)

「これ以上留まっても」という条件が thème となっているのに対し、その帰結である「我々は何も得ることができない」という部分が、rhème として後置されている。しかし、この様に条件と帰結が一つの文に、共に存在することは少ないため、50) の様な例は稀である。[11]

3．　今後の問題

2．において、古フランス語における有標の語順を thème-rhème という観点から検討し、thème を大きく三つに下位区分したうえで、それぞれの実例を具体的にみてきた。もちろん、詳しく検討されねばならない問題は、まだまだ残されている訳だが、そのうちのいくつかを以下に簡単に指摘しておく。

まず、今回は主として thème についてだけ検討したが、rhème の側からの検討も行なわなければならない。たとえば 34)は、ゴーヴァンが女王にカメロットでのトーナメントの話をしているところへ、急にジルフレットが割込んでくる場面である。従ってこの文は、ジルフレットを場面に導入する役割を持った導入文である。つまりジルフレットが新情報でthèmeであるが故に動詞の後に置かれ、古フランス語の形式的制約から動詞の前の部分を埋めるために意味内容をほとんど持たない lors が置かれていると考えられる。もちろん、結果として文頭の lors が contexte に対し、新たな展開があるということを示しているという意味で thème であることには変わりがない。しかし、il y a などの型の導入文に thèmeを認めるかどうかは、さらに検討を要する問題である。

次に強調の問題がある。

51) ... ; car onques par la main d'un des freres d'Escalot n'issi *tieus cox.* (19/15)

51) の tieus cox (＝tel coup) は、tieus という語から明らかな様に既知の事柄であり、それが「エスカロの兄弟の一人の手によって行なわれたことがない」という部分が未知の rhème である。thème→rhème という配列とS－V－Cという配列が一致するにもかかわらずこの様な語順になっ

ているのは、文頭に置かれるべき thème を後置することにより、 tieus cox が強調されているためと考えられる。

また、今回は対照を表わす thème についても触れることができなかった。

しかし今後に残された最も重要な問題は、thème-rhème という意味論的あるいは機能的語順と、S－V－Cという文法的語順との関係である。今回の例の中にも、少数ではあるがS－V－Cという文法的語順と thème →rhème という配列とが重なったものがあったが、S－V－C の Sが常にthème という訳ではないのはもちろんである。この2種類の語順がどの様に分布していたのか、何らかの相補的な関係、つまり調和的な関係にあったのか、それとも競争的な関係にあったのか、こういった点を最終的に明らかにする必要がある。また、主語と主題の性格の研究も，重要な関連問題である。[12] この小論は、この様な研究に向けての出発点ともなるべきものである。

4. 結 論

1．において、我々は語順研究の枠組として thème-rhème の構造を，contexte への位置づけという観点から定義したうえで、2．で具体的な検討を行なった。そして、古フランス語の有標の語順の多くが、thème-rhème の構造から説明できることを明らかにした。今回は主として thème について検討した訳だが、3．で指摘した様な強調構文には触れなかったので、文頭の要素イコール thème という誤った印象を与えたのではないかという懸念がある。ここでもう一度強調しておくが、thème は contexte との関係で、そしてその関係でのみ決定されるのである。どの引用例においても、紙幅の関係上引用はなされていなくとも、それ以前の contexte との関係で thème が決定されていることを忘れてはならない。 我々が提案し

ている thème は、文脈から抜き出された任意の文に対して指定すること、は無意味であるし、また可能でもない。

最近、文の枠内での研究 sentence grammar を越えて、discours や conversation に関する研究が盛んになってきたが、G. Moignet も言うように、

> (L'ancien français représente) un état linguistique où la langue se construit à une distance relativement réduite du discours.[13]

であるので、古フランス語の研究にもそういった研究の成果を、慎重な検討の上で適応することにより、語順や代名詞の問題などに新しい光をあてることができるのではないかと期待される。

注

(1) thème-rhème の考え方の古フランス語への適用の可能性については、J. BATANY (1971), ≪*Ancien français, méthodes nouvelles.*≫ Langue française 10. pp.31—56の5.2.6.—5.2.8. に簡単な記述がある。また、現代フランス語に関しては、泉邦寿 (1978)「フランス語を考える20章」(白水社) の「18. 文の焦点と主題」など参照のこと。

(2) J. FRAPPIER (ed.) (1964), *La Mort le roi Artu.* (T. L. F.58). Genève: Droz.
また、この小論を書くにあたって、観点は異なるが「アーサー王の死」の文立てを詳細に研究した J. RYCHNER (1970), *L'Articulation des phrases narratives dans la Mort Artu.* Genève: Droz が大変参考になった。

(3) たとえば, L. FOULET (1930), *Petite syntaxe de l'ancien français.* Paris: Champion. 3e éd. pp.306—344. などを参照。

(4) 参考までにMarie de France のLanval の話順頻度をみると、S—V—Cが64.7%, C—V—Sが12.0%で、両者だけで約4分の3を占めている。もちろん、年代、書かれた場所、ジャンルの違いを考えなければならないので、これをそのままMort Artu の場合に当てはめることはできないが、一つのめやすと考えることができる。

(5) 以下の Mathesius の定義は、J. Firbas (1964), ≪On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis.≫ *Travaux Linguistiques de Prague,* 1. pp. 267—280. Univ. of Alabama Press による。

(6) 以下の引用例すべてについて言えることであるが、thème の定義から考えて当該文以前の部分の引用を含むことが理想的ではあるが、それは不可能なことなので、各自刊本にあたって確認して頂きたい。

(7) この考え方は、Firbas (1964) などで展開されているプラーグ学派のいう thème-rhème にかなり近いと言えるかもしれない。彼らは、情報度の最も低いものを thème,最も高いものを rhème,その間に移行部が来ると考える。この小論では thème と rhème だけを考えるが、動詞の扱いや、rhème 内部の階層関係については今後の研究課題としたい。

(8) 新旧情報, 既知一未知といった考え方については、W. L. Chafe (1970), *Meaning and the Structure of Language.* Univ. of Chicago Press (邦訳「意味と言語構造」) の14, 15章などを参照。日本語に関しては、久野暲のいくつかの論文や「日本文法研究」(大修館) で詳しく論じられている。また、大野晋 (1978)「日本語の文法を考える」(岩波新書) に興味深い記述がある。

(9) 1) の例の様に、主題の名詞句が再び代名詞で受けられている場合、これを主文の外にある要素、つまり〔名詞句一文〕という構造と考えるべきなのかもしれない。この構造が新しい情報を主題として導入する役割を持っているという分析が、E. O. Keenan et al. (1976), *Foregrounding Referents: A Reconsideration of Left Dislocation in Discourse.* B. L. S. II. pp. 240—255 にあるのを、この小論執筆後に知ったが、未知の主題の存在とその導入方法について、我々の考え方とかなり似ていると言える。彼らはこの構文を次の様に表わしている。

Referent + Background Proposition + Main Proposition.

(10) 視点の一貫性という考え方は、発話行為の研究において提唱されたものだが、これは書かれた言語についても、特に古フランス語の様に形式的制約の少ない言語においては、かなり有効であると考えられる。H. P. Grice(1975), ≪Logic and Conversation≫ *Syntax and Semantics* Vol. 3. Speech Acts. New York: Academic Press ; 安井稔 (1978)「言外の意味」(研究社) ; S. Kuno and E. Kaburaki (1977), ≪Empathy and Syntax≫ *Linguistic Inquiry* 8. pp. 627—672. など

を参照のこと。

(11) この他に移動・到着を表わす動詞の用いられている文では、目的地を表わす部分が最も rhème になりやすいということも考えられる。ただしこの場合、何が thème になりやすいかは言えない。

(12) 主語や主題の性格づけ、及び相互の関係については、Ch. N. Li (ed.) (1976), *Subject and Topic.* Academic Press. の中に興味深い論文がいくつかある。また、日本語における主語と主題の問題については、三上章の諸著作に詳しく論じられているのは周知のところであろう。

(13) G. Moignet(1966), ≪ *Sur le système de la flexion à deux cas de l'ancien français.* ≫ *Travaux de linguistique et de littérature... de Strasbourg,* IV, 1. p. 356.

(大学院学生)